

Title	2011年度アドバイザー会議報告
Author(s)	鍋田, 智広
Citation	CGEI アニュアルレポート 2011: 191-200
Issue Date	2012-07
Type	Research Paper
Text version	publ isher
URL	http://hdl.handle.net/10119/10703
Rights	
Description	. センター関連イベント報告 / Event Report, (3) アドバイザー会議 / Advisor Meeting

< 報 告 >

2011 年度アドバイザー会議報告

鍋田智広（大学院教育イニシアティブセンター特任助教）

A Report for Advisor Meeting

Tomohiro NABETA

(Research Assistant Professor, Center for Graduate Education Initiative)

Abstract : In this year, Center for Graduate Education Initiative (CGEI) had opportunities to discuss on higher education in graduate school. At the first meeting CGEI invited Professor Ohtsuka (Center for the Promotion of Excellence in Higher Education, Kyoto University). In this meeting CGEI staff talked on Faculty Development (FD) with Prof. Otsuka who has long been deal with FD in Kyoto University. The CGEI and Prof. Otuka exchanged useful and practical information from each other. The second meeting was held by inviting Professor Suzuki (Kumamoto University). At this meeting Prof. Suzuki discussed on how does CGEI staff settles on supervision policy (laboratory education policy). In this topic we talked about the question how does CGEI define the curriculum? Is it possible to discriminate education in laboratory from curriculum? The advice of Prof. Suzuki clearly showed us the problem to be solved in supervision policy (laboratory education policy). Third meeting was the extended meeting in which eight advisors attended to the meeting. While advisors came from a variety of affiliations; university in US, domestic university and companies, all of the professors who have rich and useful knowledge are top-ranking professionals about higher education. Through the discussion, the advisors made the CGEI staffs realize the importance of higher education in JAIST again since JAIST is top runner of higher education in graduate school in global field as well as in domestic field.

[キーワード：高等教育，アドバイザー会議，質保証]

1 第6回アドバイザー会議

1.1 出席者：大塚雄作教授(京都大学高等教育研究開発推進センター)，浅野教授，高木教授，岡本特任准教授，林特任助教，鍋田特任助教

1.2 場所：総合研究棟3階

1.3 日時：平成23年10月14日 14時～15時

1.4 アドバイザ：大塚雄作教授(京都大学高等教育研究開発推進センター)

1.5 概要：

Ⅲ. センター関連イベント報告

10月14日午後、京都大学高等教育研究開発推進センター 大塚雄作教授をお招きし、アドバイザー会議を行いました。大塚先生には、京都大学高等教育研究開発センターにてFDの活動を精力的にされている経験から、FDについて様々なご意見をいただきました。

FD といえば、教員は消極的なイメージがあり、いかにして参加してもらうのが議論になるが、参加することによるインセンティブを提供したり、あるいは意欲が高い学生を中心としたFDを（プレFD）を行うのもひとつの手であろうとのことであった。また、本センターの中心的なミッションのひとつであるポリシーの策定についても、なにをどこまで規定するのか、戦略性をもって取り



図1 第6回アドバイザー会議の様子

組むことが重要であるとの意見をいただきました。確かに、JAISTには、世界最高水準の教育・研究を為すということと、国際的通用性をもった人材を育成するという2つのポリシーがあるが、これらは、目指す教育像学生像が若干異なっており、したがっておのずと教員や学生に求めるところが異なってくる。こうした点を明確にした上で本センターが最高に貢献できる関与の仕方を考えなければならないように思う。

2 第7回アドバイザー会議概要

2.1 日時 平成24年1月23日 14時～15時

2.2 アドバイザ: 鈴木克明教授（熊本大学大学院社会文化科学研究科）

2.3 参加者 , 浅野センター長, 池田教授, 岡本特任准教授, 林特任助教, 鍋田特任助教

2.4 概要:

1月23日、熊本大学大学院社会文化科学研究科の鈴木克



図2 第7回アドバイザー会議の様子

明教授をお招きし、第7回アドバイザー会議を開催した。会議ではカリキュラムポリシー、スーパービジョンポリシーについて議論された。JAISTでは、コースワーク重点化でカリキュラムが設計されている。こうした背景にあって、カリキュラムポリシーに研究室教育が含まれていないことについて鈴木教授から問題提起がされた。これについて、JAIST

におけるカリキュラムを再定義し、それをいかにしてポリシーのような制度として制定し運用していくのかを見通しを立てることの重要性が提案され、議論された。

また、本学では専門性に立脚した教養を身に付けた人材（ π 型人間）の育成を目指して複眼的な教育を行っている。このことを踏まえて、鈴木教授は、複眼的な教育という点からコースワークと研究室教育の連携を目指すことが重要であると指摘した。例えば、研究室間での学生の流動性を高める、あるいは研究の基礎になるような一般的能力を獲得させるための評価体制（ルーブリック）や学習目標の設定を、ポートフォリオなどを用いて支援、実施することが提案された。また、JAISTにおいては、既に研究室教育における複眼的教育として副テーマや3人指導体制といった制度があることから、これらカリキュラムポリシーに含める、あるいは研究室教育のためのスーパービジョンポリシーとコースワークのポリシーを策定することを通して連携を深めることの重要性が認識された。

3 拡大アドバイザー会議

3.1 開催日：2012年2月27日

3.2 場所：北陸先端科学技術大学院大学品川キャンパス

3.3 アドバイザー： 飯吉透教授（京都大学）、早田幸政教授（大阪大学）、小野哲雄教授（北海道大学）、玉木久夫教授（明治大学）、青野透教授（金沢大学）、藤田友之氏（技術研究組合光電子 NEC）、平木肇氏（日本能率コンサルティング）、鳥居朋子教授（立命館大学）（敬称略）

3.4 参加者（敬称略）： 浅野哲夫教授、高木昌宏教授、長谷川忍准教授、フェスタガード特任准教授、林透特任助教、鍋田特任助教

3.4 概要：

去る2012年2月27日午後、本学東京キャンパスにて本センターアドバイザを招いて拡大アドバイザ会議を開催した。会議ではアドバイザそれぞれの自己紹介の後に、センター長の浅野教授から平成23年度のCGEIの活動報告があった。すなわち、本センターで草案を作成した4つのポリシー案（アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、グラジュエーションポリシー、スーパービジョンポリシー）と、学位基準におけるラーニングゴールの策定、そして学習成果の評価フレームワークの提案である。会議においては、ポリシーのうち、特にスーパービジョンポリシーが集中的に議論された。スーパービジョンポリシーとは、研究室教育における学生指導のための指針である。研究室教育を独立させ、コースワークの教育と区別してポリシーを作成することについてどのようにすべきかという指摘がなされるなどした。例えば、インターンシップや学会発表などの学外活動についての学習や教育をどうするか等の問題点はあるものの、私たちはそれでもなお、スーパービジョンポリシーを策定させることが有意義であると考えている。学習や教育に関するポリシーとしてスーパービジョンポリシーを確立させ、カリキュラムポリシーと対置させることで、ひとりひとりの学生がいかにしてコースワークにおける学びの経験を研究室における学びに結びつけ、JAISTで実りのある学習体験を積むことができるのかを考えるためのきっかけになるだろうと考えるからである。それぞれのポリシーの関係性を明示し、違いや共通点を認識させることはスタッフや教員にとっても有意義だろうと考える。学

習成果の評価フレームワークについては、浅野センター長から、学習成果の評価や教育にルーブリックを使用することが提案された。ルーブリックとは、それぞれの科目をコンピテンシの水準ごとに整理し、学習者がどの水準まで達成できているのかを評価するためのツールである。この点に関しては、大学院での学びを測定するためには、コンピテンシの水準が適切に設定できるのかといった点について批判がなされたが、私たち CGEI が提案する運用の目的は、学生と教員との間の教育の意図の共有である。すなわち、研究室教育あるいはコースワークの教育において、ルーブリックのように可視化されたツールを使うことによって、学生は教員がどのような意図で学生の成果を評価しているのかを話合うことができる。

3.5 質疑概要：(敬称・役職名略)

3.5.1 ポリシ策定について

浅野：文部科学省から要請があった3つのポリシを策定することがあった。本センタではカリキュラムポリシをコースワークのためのポリシとし、大学院としての研究指導のためのスーパービジョンポリシを主張している。したがって、センタではスーパービジョンポリシを含めて4つを提案している。

飯吉：スーパービジョンポリシとは元々はどういうものなのか。スーパービジョンという言葉に誤解を招くものがあるのではないか。もうすこし学生をガイドするという意味を込めた方が良く思う。言葉として確立されているのであれば良いが、日本に広めようとするのであれば、もう少し適切な名前があっても良いと個人的に思う。

岡本：カリキュラムポリシをコースワークポリシとして、ラボワークポリシとするように提案していた。

玉木：ラボワークというのは演習のようなものも含むのか

岡本：この言葉も、どこまでをラボワークと呼ぶのかが難しいところがある。例えばインターンなど。そうすると、インターン先で学生と協同している担当者の指導という意味でスーパービジョンと呼ぶのも良いのかと思っている。

高木：スーパーバイザの名詞形でスーパービジョンのポリシとしているのだが、ラボワークでは教員が学位授与のためにしている指導という意味が弱くなってしまうように思う。スーパービジョンというのは教員が学位授与に向けて指導するという意味を込めている。どの立場からポリシを書くのが重要だと考えていて、この場合はスーパーバイザのポリシだからスーパービジョンポリシとしているのだと思う。

玉木：指導教員にもスーパーバイザとアドバイザーとどちらが良く使用されるのか。

飯吉：教育観の違いによって異なるのだと思う。スーパーバイズだと言葉のニュアンスとして教員主導というのが強いが、学習の支援という意味であるならば、アドバイザーというのも違う。学習支援であればラーニングサポートというのもある。やはり教員が上というニュアンスがある。アカデミックアドバイスの場合には学生生活も含めるので研究室教育以上の意味がある。アカデミックアドバイジングというのもあるが、生活全般を含めているので、それでもない。この議論を聞くと、研究指導という感じがするので。

3.5.2 質保証について

浅野：カリキュラムマップという、科目とラーニングゴールを整理すると良いだろう。

ループリックというのは評価を階層的に配置して基準として示す方法である。こうした方法を研究室教育にも適用するのが重要である。こうした基準を作ることで、教員と学生との対話を促すことができるのだと考える。

飯吉：ループリックやカリキュラムマップについても、特徴的な学習目標を示すことが重要だろう。

高木：私が考えているこの使い方は、学生と教員の学習についてのズレや共通部分を掘り起こすためのものである。

飯吉：単にアリバイ作りのようなものではなくて、分析のツールとして使用するということですね。教員はこれを学習させたいと言っているが、学生の学びとは違うことを言っているといったことが分かるのかもしれない。教員同士のピアレビューに使用できることも考えると、研究室教育の質保証にも使用できるのかもしれない。

青野：博士論文研究基礎力審査の導入ということが中央教育審議会の大学院で実現すべきことの中に記入されている。これがどうなるかは分からないが、こうしたループリックを用いて評価をしておいて、客観的評価に変えるようなことが起きるのかもしれない。将来を見越した評価制度の導入をした方が良いと考えている。

浅野：評価を変えていくには、評価のフィードバックを拾い上げてそれを評価制度に反映させることが重要だろうと思う。しかしそうした仕組みを考えたり、実装するのは簡単ではないのでじっくりと取り組んでいきたい。

浅野：全学 SD・FD とについて、様々な講師をお招きして実施してきた。最近の傾向としては単なる講演会というよりはグループワークをとりいれたものの方が良いようだ。来年度はグループワークを入れてやっていきたい。職員と教員が助け合ってやっていき、共に創るという意味で共創ということで議論を進めている。

浅野：試験問題データベースについては、今年度から動き出している。アルゴリズムに限っているが、テキストから試験問題の部分を取り出してデータ化している。

浅野：教育学生データベースは、長谷川先生と林先生が協力してやっている。コースワークと留学に関する情報と、就職先の情報がばらばらになっていた。この3つの情報を統合しようということで、セキュリティを考えながら現在やっている。最近基礎的なデータを取り込むことができるようになってきている。一応、データを見ることはできるようにはなったので、これから IR ができればと思っている。

就職データということが資料に書いてあるが、就職した後のことはデータになっているのか？

林：現在は、入試情報と学務、就職に限定しているが、就職した後のことは同窓会データの統合も考えながら今後データ化していきたいと思う。

飯吉：アメリカでは、どれだけ貢献したかというのと、出身大学の関係性を調べる調査は企業側で行われている。アメリカがこれができるのは、専門技術やコンピテンシがカリキュラムで整理されているからである。CGEI で、評価体制を整理することは企業にとっても有意義である。

浅野：修了要件は、JAIST は他の大学に比べて厳しく設定している。コースワークは導入、基幹、専門、先端の4つに階層的に整理している。また、情報では領域が5つに分かれており、そのうち4つをすべて履修していなければならない。また、筆記試

Ⅲ. センター関連イベント報告

験を重視している。このように幅広い領域の履修で筆記試験を課すというのは初代学長の厳しい意向が反映されている。こうしたことが視野を広げるのに役立っていると思っている。しかし、現実にはもう少し緩めるという議論が必ずあるが、なんとかこうした厳しさを維持している。

小野：当初は5領域全部を履修する必要があったから今よりも厳しかったが、私はそのような厳しい体制を受けてきて良かったと思っている。そうしたことがあれば領域が変わっても対応できる視野の広さを獲得できたと思っている。

北陸先端科学技術大学院大学 (JAIST) 大学院教育イニシアティブセンター における取組

Japan Advanced Institute of Science and Technology (JAIST)
Center for Graduate Education Initiative
Tasks

★JAISTの取組★

(1) JAISTの創設の理念

世界最高水準の豊かな学問的環境を創出し、その中で次代の科学技術創造の指導的役割を担う人材を組織的に育成することによって、世界的に最高水準の高等教育研究機関として文明の発展に貢献することを目指す

JAISTの特徴

- ・新構想の国立の独立大学院大学
- ・幅広く門戸を開放した学生の受入れ
- ・組織的な大学院教育
- ・社会に有為な人材の育成
- ・最高レベルの教授陣
- ・社会・産業界との連携

(2) JAISTの構成



知識科学研究科

—知識社会のパイオニアを養成—



情報科学研究科

—安心な電子社会の基礎を築く—



マテリアルサイエンス研究科

—物理・化学・バイオを融合する科学の創生とその応用展開に挑む—

- ・先端融合領域研究院
- ・先端領域基礎教育院
- ・先端領域社会人教育院
- ・ライフスタイルデザイン研究センター
- ・情報社会基盤研究センター
- ・ナノマテリアルテクノロジーセンター 等

(3) JAISTの教育システム

★コースワークの重視

「導入講義」「基幹講義」「専門講義」
「先端講義」を段階的に習得できる体系的カリキュラム



★複数指導体制

学生1人に対して、主指導教員、副指導教員、副テーマ指導教員の3人による教育研究指導体制

★主テーマ・副テーマ研究による複眼的な研究活動

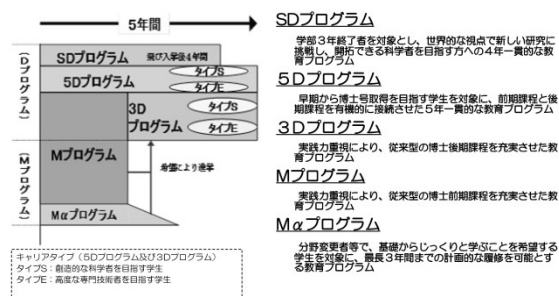
★クォーター制

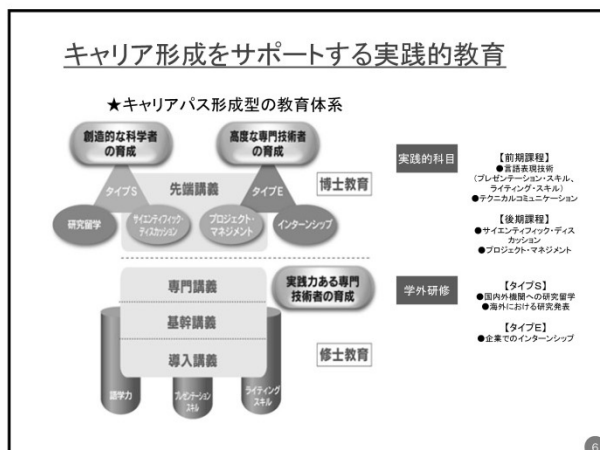
- ・1期間8週間、年4期間設定
- ・1期間で1つの授業科目完結

⇒ 効率的な履修が可能

(4) 新教育プラン(H20～)

学生が主体的に教育プログラムやキャリアタイプ(S・E)を選択し、自らの修学目的を明確化できる教育体系を整備





(5) 東京サテライト(先端領域社会人教育院)

社会人を対象としたコースを開講(品川インターシティ内、JR品川駅そば)



知識科学研究科
「技術・サービス経営(iMOST)コース」
「先端知識科学コース」



情報科学研究科
「組込みシステムコース」
「先端IT基礎コース」
「先端ソフトウェア工学コース」

★大学院教育イニシアティブセンターの取組★

(1) Mission & Vision

【Mission】

- 国際的通用性を備えた先導的な大学院教育モデルの提示

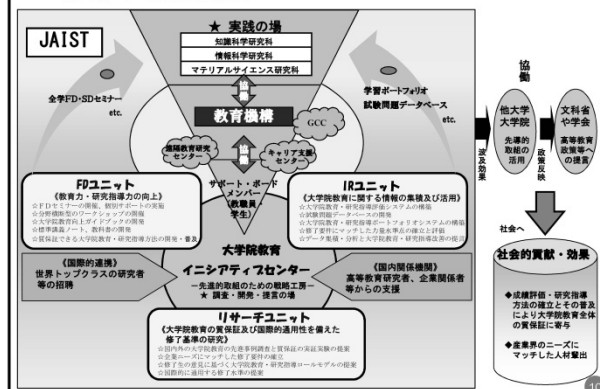
【Vision】

- 本学が取り組んできた大学院教育に関する先進的な取組実績を基礎に、国内外の大学院との緊密な連携を図りながら、国際的通用性を備えた大学院教育の質保証と修了基準の確立に取り組み、他大学の範たる次世代スタンダードの提示を目指す。

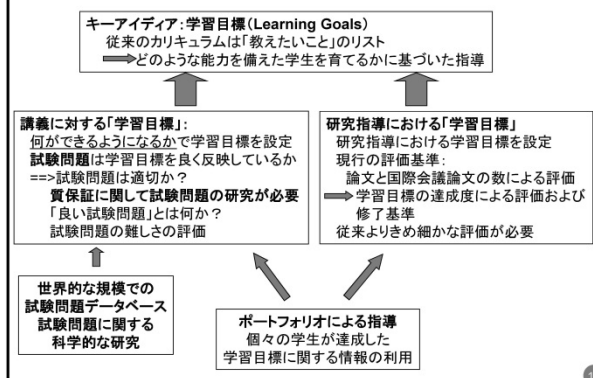
- 文科省特別経費支援事業

平成22年度～平成26年度(5年間)

(2) Function



(3) Key Idea



(4-1) Projects

FDユニット

●全学FD・SDセミナーの企画実施

2011年度

第1回『大学改革再考～激変する時代の要請～』

ー私の半世紀にわたる教育・研究の体験を通してー』

(6月20日開催、講師：東京工大理事・慶応大名誉教授 相職秀夫先生)

第2回『大学院FDと大学院生のための教育力育成』

(10月14日開催、講師：京都大高等教育研究開発センター教授 大塚雄作先生)

第3回『自律的学習のためのインストラクショナルデザインとは』

(1月23日開催、講師：熊本大学大学院社会文化科学研究科教授 鈴木克明先生)

●教育システムの再構築提案

大学院教育（講義や研究室教育）の質保証フレームワーク検討
（ポリシー&ガイドライン）

12

(4-2) Projects

IRユニット

●大学院教育・研究指導ポートフォリオの構築

⇒大学院生と教職員による協創、先行事例調査

●試験問題データベースの開発

⇒アルゴリズム分野から段階的試行

●教育・学生統合データベースの構築

⇒学修活動を通じたロールモデル検討

13

(4-3) Projects

リサーチユニット

●大学院教育における先進事例調査【2010年度】

●研究室教育実態調査【2010年度～】

●博士修了基準調査（マッピング）【2010年度～】

⇒政策動向、他大学・シンクタンクの
先行調査を基礎に

14

(5-1) Support Board

- ・センター構成員のほか、センター事業に関心のある学内外関係者の自由参加を奨励（原則として毎月1回開催）

【内容】 (1) 大学院教育に関する論文紹介、事例紹介 (2) 新たな試みの提案、問題提起
(3) 外部講師による講演会 (4) ボードメンバーによるグループワーク

【実績】 2011年度

開催月	テーマ内容等
4月	「JAIST教育システムの評価手段の開発に向けて」 (情報科学研究科 落本 重 又 順 (DONG WookSeok))
5月	「プログラミング・アルゴリズム教育におけるIT支援：これまでの実践と今後の構想」 (明治大学理工学部情報科学科 玉木 久夫 教授)
6月	「大学院リベラルアーツとしての数学の可能性」 (大学院教育イニシアティブセンター 岡本 吉史 特任准教授)
7月 (拡大)	JAIST大学院教育のこれからを考えるーJAISTはどんな学生を育てようとしているのかー 「JAIST教育改革で目指すもの」 (先端先端科学技術大学院大学 片山 卓也 学長) 「先端領域基礎教育院の非専門教育設計と専門教育改革の狙い」 (先端先端科学技術大学院大学 日比野 靖 理事(教育機構担当)) 「大学院教育質保証のための4つのポリシー・ガイドラインの紹介ほか」 (大学院教育イニシアティブセンター長 浅野 哲夫 教授)
9月	「教育・研究支援のためのプロセス情報の取得と活用」 (遠隔教育研究センター 長谷川 忍 准教授)
10月	「大学院教育イニシアティブセンターの可能性」 (大学院教育イニシアティブセンター 林 達 特任助教)
11月	「大学院教育における自発性の育成を重視したJAIST eポートフォリオシステム」 (大学院教育イニシアティブセンター 鍋田 智広 特任助教)

15

(5-2) Support Board

- ・第12回拡大サポート・ボード「JAIST大学院教育のこれからを考えるーJAISTはどんな学生を育てようとしているのかー」

JAIST教育改革や大学院教育イニシアティブセンターでの取組内容の説明

「時間的制約の中での語学教育の達成度」、「留学生が求めるレベルや必要性に応じた日本語教育プログラムの柔軟性」、「学生の自発性を発揮させるための環境づくり」、「履修計画書の作成の支援体制」、「JAIST教育改革における4つのポリシー・ガイドラインの有用性」、「基礎教養科目の授業設計の具体」など、幅広い質問が出された。



16

(6-1) Collaboration

JAIST創立20周年記念シンポジウム

21世紀の大学院教育を展望する

ー高等教育のグローバル化、情報化、オープン化を巡ってー

JAIST 大学院教育イニシアティブセンター客員教授 飯吉 透

(米国MIT 教育イノベーション・テクノロジー局シニア・ストラテジスト)



17

(6-2) Collaboration

海外からの研究者を迎えて



**Howard Peelle 教授との
ディスカッション**

米国マサチューセッツ大学アマースト校
教育学部 教授



**Subhas C.Nandy 教授との
ディスカッション**

インド統計大学 (ISI) 教授

18

(7) Others

広報活動

アニュアルレポート 2010
CGEI NEWS No.1 - No.6



19